平成１７年度　生涯教育専攻　卒業論文　要旨

『人権摩擦に関する実証的研究　―施設コンフリクトを中心として―』　　**荒木　誠夫**

本研究は、施設コンフリクトの問題を取り上げ、施設コンフリクトの起きる要因や施設と地域の方との関わり合いから、障害者の方に対する捉え方やイメージの変容を研究の目的とした。地域生活支援センター「ふれあいの里」、大阪市の支援策などを事例として研究した。研究の結果、施設コンフリクトが起こる要因、また施設が建設されるとき、約１割の施設が反対運動を受けや偏見を感じるが、施設側が積極的に地域と関わりあうことで、地域の方との交流が産まれ障害者の方に対する捉え方、イメージに変容が見られることを解明した。その際、施設が地域の方の不安などに答えるなど行い、施設、障害者に関しての情報開示をできるところはおこなうことが大切なことがわかった。それから、人間関係を築くことが重要である。
(指導担当・今西)

『自己実現を目指す生涯スポーツ
―　釣りに関する体験的観点からのアプローチ　―』　　**池洲　輝彦**

本研究は釣りを「生涯スポーツ」(LifeLong Sport)の一環として取り上げ、現代社会における重要なテーマでもある「健康づくり」「生きがい」といった自己実現を目指す要素について考察するものである。
ここでは、釣り活動の実態を考察する対象として、自ら所属する「奈良勤労者魚釣クラブ」に焦点を当て、クラブのメンバーに対し聞き取りやアンケート調査を行った。
調査の結果として、釣り行動は、生活、労働、健康維持の活力源であるとともに、生涯にわたり実践していく持続性を有していること。「生きがい」に関しては、釣行動を前提とした自然感、解放感を体感する時が最も強く感じられ、その環境下のもとに、満足する釣果、釣友との交流、等の要素が重なり合い、より増幅される状況である。その結果、心身における爽快感、充実感、疲れやストレスの解消等が得られることから健康維持の点においても寄与している。
釣りは、自然環境の変化に対応する感覚、長年にわたる経験の積重ね、絶え間ない創意工夫、といった要素を体力、気力の続くかぎり、生涯にわたって学習、実践していく点において「生涯スポーツ」としての意義があるものと考える。
(指導担当・今西)

『「健康ブーム」を探る』　　**井上　裕子**

健康ブームの流れや変化を探るために、古くから続いている女性誌『主婦の友』の長年にわたる健康記事を取り上げて、研究した。１９６４年から２００４年の約４０年間の健康記事を探し出し、４０年間の様々な内容を照らし合わせ、傾向や、用語の変化、時代の流れと共に違っているものを上げ、考察した。

一つ目の傾向は、ガンが取り上げられている記事の内容の変化についてである。時代が過ぎていくにつれ、新しい名前の発ガン物質やがん予防の食品が多く載せられていた。ガンに対する医学の進歩が見えた。

二つ目の傾向は、夫婦や家族のことを考えた記事と、主婦自身を対象として手軽さを売り物にしている記事を比較した。６０年代から７０年代までは子供や夫の健康を特集しているものが多いが、８０年代からはほとんどなく、家族の記事よりも忙しい主婦のために、手軽で身近なもので健康やダイエットをしようというものが多い。

三つ目の傾向は、健康記事の内容や用語の変化を見た。６０年代から８０年代前半まで、効果が生活全体に関わるような内容であったり、大事や難病を治したというように、今から見ると少し大げさな内容が多い。８０年代後半からは、疲れを取るや若さを治す、便秘や吹き出物改善といったように難病を治すというより、身近で素朴な悩み解消を効果としている。

健康記事を探し出していても何度も傾向がつかめないことがあり、投げ出したくなる時もあったが、時代と共に雑誌の記事が変わっていくことが見ることができ、楽しさもあった。健康ブームばかりでなく、生涯教育を行う上で健康生活を送っていることの重大さを忘れることなくこれからも探っていきたい。

(指導担当・石飛)

『環境問題への取り組みに関する一考察　―天理教の教えをもとに―』　　**植田　和人**

現在、地球環境はきわめて深刻な状況にある。ニュースや新聞では毎日のように世界のあらゆる場所で自然災害など環境問題の悪化の様子が報道されている。

環境問題への取り組みを推し進めていく上で、その根本である自然環境に対する価値観をしっかりと持っておく必要がある。私はその自然観の中で「宗教的自然観」が重要なキーワードになってくると考える。宗教の持つ宗教的英知や、人間の力が及ばない偉大なものの存在に対する畏敬や畏怖の念などが与える影響は大きいのではないだろうか。

そこで本論では、環境問題が起こってきた要因の一つとして、人間自身の「自然に対する考え方」や「自然観」に問題があるとの認識に基づきながら、今後、環境問題への取り組みを行っていく上で人間と自然の調和と共生を可能とするような生き方や価値観を、宗教的な視点、主として天理教の自然観をもとに考察する。

(指導担当・岡田)

『フリースクールについて～居場所としてのフリースクールの視点から～』　　大木　和絵

現在多くの不登校の子どもたちは教育支援センター（適応指導教室）や NPO 法人などのフリースクールに通っているとされている。そこで、「不登校」の子どもたちを対象に、現在のフリースクールの現状や役割について研究した。

第一章では、まずフリースクールの定義、分類を調べた。また、外国のフリースクールとは異なる独自の成り立ちをしている日本のフリースクールの歴史を調べ、不登校と深く結びついていることがわかった。そして、不登校の現状、不登校となったきっかけ、対応についてまとめた。

第二章では、日本のフリースクールの例として、東京シューレとわく星学校について比較し、フリースクールが子どもたちの「居場所」や「癒しの場」という役割をしていることを述べた。

第三章では、フリースクールと適応指導教室へインタビュー実施し、それぞれの現状について知ることができた。

第四章では、これまでのことから居場所としてのフリースクールの視点から、子どもたちにとって必要で、なくてはならない場所になっているということをまとめた。

(指導担当・石飛)

『人を「信じる」ということについて』　　岡島　晃恵

第１章では、山岸俊男『信頼の構造』（東京大学出版会・１９９８）を引用して「信じる」ということの概念の整理をした。特に、信頼と安心との区別は、アンケート調査の分析においても大いに役立つものとなった。

第２章では、第１章で整理した概念をもとに、大学生に対する「信じる」ことの意識調査を行った。アンケート内容は、『人を「信じられなくなった」経験を聞き出し、「信じる」ことに対する考え方・捉え方を調査した。そして、[信頼度]・[宗教の信仰の有無]・[人を信じられなくなった経験の有無]などの視点から差異を分析した。

第３章では、調査結果から[信頼度]に見られる差異を中心に分析し、『人を「信じる」ということについて』自分の意見を述べた。

(指導担当・岡田)

『大学生の携帯電話によるコミュニケーション』　　**川野　忠司**

携帯電話、パソコン、インターネットの爆発的な普及によりコミュニケーション手段は大きく発展した。このコミュニケーション手段の発展が対人関係のあり方、行動に少なからず影響を与えたことは確かである。しかし、コミュニケーション手段が発展したにもかかわらず、現代の若者は、コミュニケーション能力が欠けているとよく言われている。

若者のコミュニケーションの現状を知るために、携帯電話に注目し、大学生の携帯電話によるコミュニケーションについて、天理大学生各学年男女５名ずつ計４０名にインタビューをとり分析した。

その結果、携帯電話によるコミュニケーションは、大学生のニーズにあっており便利であるが、金銭面、気持ちが伝わりにくいことなど本来行われてきた対面コミュニケーションに比べ限界があることがわかった。また、携帯コミュニケーションにはメリットとデメリットの二面性を持っていることもわかった。

(指導担当・井戸)

「学歴社会としての文化的再生産論」　　**上潟口　勘亨**

「格差が拡大しているという実感が強くなっている」新聞やテレビなどでよく言われている中で「格差がある」という現場を自分なりに探してみようと思い大学生の仕送りを手がかりに大学教育における「格差」を指摘した。

第一章「下流社会と中流崩壊」

所得における格差に関する文献から若者の格差が広がっているという事が分かった。

第二章「学歴社会は崩壊したか」

「学歴社会の崩壊」と言われているがそのような言説によって受験競争から降りる人が増えてくると言うことが分かった。

第三章「文化的再生産論と大学生活における転換の戦略」

「文化的再生産論」の説明と大学生の仕送りを手がかりに仕送りの多寡によって大学における成績に差が出てくるのではないかという可能性を指摘した。

第四章「格差縮小へむけて」

大学における学生の学力を保障する取り組みを紹介してこの取り組みが広がっていくことを希望することでこの格差に対する対応策を示した。

(指導担当・石飛)

『現代人とカラオケ　－　娯楽として誕生したカラオケの可能性　－　』　　栗木　裕仁

人間は昔から生活と共に歌を歌ってきた。その延長に現代に日本を代表する「カラオケ」が存在する。「カラオケ」は主に娯楽目的で世間に広まり、今やカラオケ人口は５．６００万人、カラオケ関連事業は１兆円に近いと言われているほどになっている。

その「カラオケ」の誕生から歴史を振り返ってみると、カラオケマシン本体のめざましい改善の努力が見られ、現在のマルチメディア技術とも大きく関わっていることがわかった。

そして現在では、娯楽目的だけではない利用も行われている。現在の問題の１つでもある「カラオケ」の緩和や、カラオケで「歌を歌う」ことで様々な効果があることが明確になってきているのである。何気なく人間は歌を歌ってきただけではないのであり、これから先もっと様々な目的で歌は歌われ、「カラオケ」が使用されるであろう。

(指導担当・岡田)

『地域での子どもの社会教育に関する研究
―公民館での主催事業を事例として―』　　酒井　美帆

今の子どもは様々なものを失いつつあると言われている。そういった中で私は、子どもたちが失いつつあるものを今後補うために、学校での授業や取り組みだけでなく、地域で様々なことを企画し、子どもたちに色々なことを体験させ、様々なことを感じ得させてあげられる機会づくりが必要ではないかと思い研究することにした。第１章では現在の体験活動の現状と体験活動の変化によって子どもたちが低下しつつあるものについて述べている。第２章ではそういった低下しつつあるものを身につけさせる場として公民館をあげている。公民館の中でも奈良市生涯学習財団の公民館と参考までに三重県にある公民館を取り上げ、そこで行われている主催事業の概要について述べている。第３章では、奈良市生涯学習財団の公民館で行われている主催事業を中心に職員や講師の方、保護者や子どもたちへのインタビュー及びアンケート、実際に活動に参加することによって感じたことなどから、子どもたちが活動に参加することでどういったことを得ているのか、また感じているのかについて述べている。第４章では体験活動の重要性とそういった体験活動が今後地域で行われることの必要性について述べている。

(指導担当・石飛)

『「児童いきいき放課後事業」についての研究
―大阪市日本橋小学校を事例として―』　　阪本　克美

私は「児童いきいき放課後事業」（愛称：いきいき活動）を知り、一昨年の夏休みから大阪市浪速区にある日本橋小学校のいきいき活動に、指導員として現在も参加をしている。参加することで、感じたことや、課題、問題点を明確にしたいと思う。
この研究は一般論ではなく、自ら参加しているからこそという内容を心がけ、それを特徴にしていきたい。
目的は、第一に現状を把握し、問題点を明確にすること。そして第二に、「いきいき活動」が文字通りいきいきと活動していくために、これからどのような点に力を入れていくべきなのかを明らかにすることである。
　そこで事業の充実を図る事を目的とし、日本橋小学校の保護者と児童にそれぞれアンケート調査を行った。その結果から問題点や、また子どもたち一人一人の願いや思いを充分に叶えているかなど改善すべき点を見つけ、今後の活動へ取り入れていきたいと考える。
また児童を預かるという上で最も重要な「安全」について調べ、保護者や児童に「安心感」を持ってもらえるように努力する必要があると明らかになった。
　今後こうした課題を解決しながら、「いきいき」をさらに活性化し、充実したものにしていく必要があると考えた。
(指導担当・井戸)

『ゆとり教育に関する研究―総合的な学習の時間と関連』　　竹中　聡

　まず初めに、ゆとり教育と総合的な学習の時間との関係について述べていく。ゆとり教育に求められていることそれは、「生きる力」です。総合的な学習の時間で学校が行っている事は主に、ボランティア活動や自然体験、職場体験、年齢層の離れた人とのコミュニケーションなど生きていくうえでもっとも重要なことである。
　ゆとり教育の「生きる力」と総合的な学習の時間が行っていくこととが一致している。これより、ゆとり教育を達成することと総合的な学習の時間を行っていくことが一致した。総合的な学習の時間をもっと充実したものにすることでゆとり教育の目標、そして一人一人の「生きる力」が生まれてくる。
　この研究で奈良市A小学校と生駒市B小学校を比較し総合的な学習にどのような違いがあるのかを研究した。しかし、土地柄や人口が奈良市と生駒市が似ていたことからか、大きな違いは見られなかった。いろいろなカリキュラムをこなしていくにはかなりの時間と人がいることからどのカリュキュラムを行うのもかなり時間と手間がかかっていた。
(指導担当・岡田)

『日本におけるニートに関する一考察』　　**谷　岩根**

働かない若者＝ＮＥＥＴ（ニート）と呼ばれ、２００４年の流行語に選ばれ社会現象にもなった。これからの日本を担う若者に何が起こっているのか、ニートが生まれる原因は何なのかなどを実際にニートのインタビューを中心に研究した。
第一章では日本におけるニートの定義とニート人口など調査し、ニートを生む背景を述べた。
第二章では国のニート対策の一つに「若者自立塾創出推進事業」というものがあり、その機能や現状を考察し、そこで塾生として参加しているニートの人達のインタビューを行った事を述べている。
第三章では第二章の研究を中心にニートをタイプ別に分け、それぞれに合った就労支援策を考え、これから行うべき就労支援の方向性を述べた。
本研究で学んだことはニートにはそれぞれタイプがあり、どのタイプにも共通することはコミュニケーション能力が不足している事である。このような能力を養う支援を考えていくことが今後の課題であると考える。
(指導担当・井戸)

『アメリカのボランティアに関する研究』　　**中谷　由香里**

高齢化社会や深刻な社会問題を解決していく上でボランティアの重要性が高まっている。ボランティア大国といわれているアメリカのボランティアの活動や課題を取り上げ、これからボランティアを進めていくために、日本はアメリカのボランティアから何を学び、今後のボランティアをどうするべきか考えることを目的とした。ここでは、アメリカの３つの大きな組織による活動とアメリカの NPO 活動を紹介し研究した。研究の結果、アメリカには非営利団体、連邦政府、地方公共団体による活動が大きな存在としてあり、ボランティア活動を支援・育成・普及させるため重要な機関であることが分かった。NPO については、アメリカにおいても発達しているからこそ多くの分野で問題を抱えており、改善していかなければならないことは多いことを明らかにした。NPO に対する期待が高まる中で日本はアメリカから学ぶべきものは多くあり、他の国のボランティアを研究することによってこれからのボランティアについて必要なことを学べることが分かった。
(指導担当・岡田)

『生きがい支援としてのレクリエーションの効果』　　**西村　徹**

レクリエーションには様々な効果があり、その中の一つの楽しむという観点からデイサービスにおけるレクリエーションが生きがいとなっているのかを検証してみたいと考えた。

デイサービスとは日帰りの通所介護施設であり、本研究を検証するために訪問したデイサービスは奈良県天理市にあるゆんたくという名で、平成１５年２月に開所し、普段は看護士含め約８人の職員が勤務している。そしてデイケアではなくリハビリが利用目的ではないため高齢者の憩の場となっている。

デイサービスゆんたくでは午後からレクリエーションを行っており、内容は歌を歌ったりボールを使ったゲームやドライブなど様々なものが行われている。

生きがいとなる要素として同じ世代との交流や純粋にレクリエーションを楽しむ心などが伺える。そういったことからレクリエーションが生きがいの一つとなっていると考えられる。

(指導担当・今西)

『天理教少年会活動における現状と課題』　　**畑田　比呂貴**

本研究は天理教少年会の平成１６年度の活動方針と、活動内容をとりあげて、考察と実施結果をまとめたものである。一般的に現代の青少年全体の行動を見ると、次のような問題があがってくる。社会の基本的なルールを守るという意識の欠如、自己中心的で自己制御力が十分ではないこと、自尊意識の育成が未熟なことである。これまで青少年の健全育成は、地域の青年会活動や子ども会活動などの社会教育に関わる活動が支えてきたが、近年ではこうした活動が低調になり、地域の教育力の低下につながっている。天理教少年会活動の「こどもおぢばがえり」、「教会おとまり会」では、これらの問題にどのような影響をもたらすかを見たところ、集団行動・団体生活により親離れによる自立の促進、ルールの尊重や集団の中における自己制御、交友関係の拡大等様々な利点が出てきた。このことから、個人より集団の方が自立、自己形成、個人の成長に大きな変化を与えるという結果が得られた。

(指導担当・今西)

『公立高校における開放～奈良県立学校図書館開放の現状・課題～』　　**福井　英吏**

本論文は奈良県の事業である奈良県立学校図書館開放（以下、開放図書館）についての現状と課題を研究したものである。研究方法として、奈良県の職員と開放が行われている学校を無作為に選び学校図書館にかかわることを司書にインタビューした。そのインタビューを研究事例として、現状の把握や、さらに課題を追求していくことにした。インタビューからは、さまざまな現状や課題が見られた。それらのことをふまえて、課題の解決に取り組み、解決策を提示した。研究の結果、地域との交流にとても良い事業なのではないかということがわかった。ほかに、課題として、防犯や利用者不足などが上げられることがわかり、これらの解決策として、防犯のためのマニュアル作成や開放図書館を知ってもらうために広告作成などが大切なのではないかと考えた。開放図書館という事業がとてもすばらしいものだと感じているので、これからも、開放図書館がよりよく利用されていけば良いと考えた。
(指導担当・今西)

『天理教における社会福祉活動に関する研究』　　**松川　祐**

社会福祉の発達史において宗教教団が果たしてきた役割は大きい。我が国においても、明治、大正及び戦前期において社会福祉の国家責任が明確でなく国家による消極的な救貧政策が行われていた時期に、宗教者がその積極性、自発性、宗教性、奉仕性を発揮して、早くから学校教育、社会教育、あるいは教誨活動、慈善事業、社会福祉事業を展開してきた。その中で、私が信仰する天理教に焦点を当てて、研究をした。

第１章では、天理教における社会福祉活動の歩みについて調べた。

第２章では、天理教の教祖中山みきの教えと社会福祉の精神について、教祖の模範などから考察した。

第３章では、実際の教内福祉施設（東愛保育園）を取り上げ、園長先生にインタビューをし、現状や課題を述べた。

教内においても、福祉など「おたすけ」ではないと考えている人もまだまだ多い。もう一度教内をあげて福祉の重要性を説いていかなければならないと思う。
(指導担当・井戸)

『農村地区による生涯学習の研究』　　**向井　健一**

本研究は、農村地区による生涯学習を調べてみた。農村地区のモデルは、出身地である和歌山県のかつらぎ町を舞台に調べてみた。
第一章は、かつらぎ町の歴史と概要、また、かつらぎ町が他の街に誇れる特徴ある風景を調べた。
第二章は、かつらぎ町における生涯学習の実態を詳しく調べてみた。かつらぎ町の社会教育計画案をもとに調べた。
第三章は、かつらぎ町の発展と生涯学習の役割を調べた。かつらぎ町の生涯学習による課題や、問題をあげ、魅力あるかつらぎ町について考察した。
かつらぎ町の生涯学習を調べてみて、人材の不足、また、より良くしたいという熱意などが感じられなかった。町と人との相互の理解が必要なことが分かった。
(指導担当・井戸)

『家庭内におけるコミュニケーションについて』　　**武者　百合**

幼児虐待や未成年による凶悪犯罪など様々な事件が報道され、その原因として家族問題が挙げられる事から、家族について興味を持ち、情報化が進む中、家族間におけるコミュニケーションのあり方、親のあり方とはどういったものなのか、この論文で考察していく。
論文構成としては、第一章を「始めに」とし、第二章では「これまでに見る家族」として、10 年間の調査に見る家族の変化や先行研究について述べた。そして第三章で「アンケート調査」による分析を述べ、第四章で考察する。
結果、天理大学では比較的、家庭内でのコミュニケーションが行われており、今の両親それぞれに満足しているようである。情報化が進む中で若者のコミュニケーションも多様化し「希薄化」していきていると言われる現代社会において、家族の存在意義というのは今後さらに重要視されるのではないだろうかと思われる。
(指導担当・石飛)

『子どもと遊び』　　**吉国　亜沙美**

私は、最近の子どもは外で遊ぶことが少なくなってきているのではないかと思い、子どもの遊びについて研究することにした。

今日では、子どもの三間(時間・空間・仲間)の減少が問題になっている。特に、子どもの遊びを中心に、地域社会の変化を考えるとき一番大きい問題であるのが、土地利用の変化である。子どもの遊び場所にとって格好の空間であるオープンスペースが縮小してきているのだ。

このように、三間の減少が問題になっている中で、現代の子どもたちはどこでどのような遊びをしているのかを調査するべく、小学校４年生から６年生を対象にアンケートを実施した。結果としては、子どもは外でまったく遊んでいないというわけではないが、遊び知識が豊富である小学校高学年の子どもたちが中学年の子どもに比べて、外で遊ぶことが少なくなっている。そのことで、遊びの伝承などがだんだんと薄れてしまう可能性があるかもしれない。

(指導担当・岡田)

『絵本と美術館』　　**鷲野　可奈**

ここ数年、美術館業界で絵本に関する展覧会が大変な賑わいとなっている。

そこで、2005 年に近畿圏内で行われた絵本原画展を主な対象として、美術館などにインタビュー調査を行い、実際に絵本原画展へと足を運んで、絵本原画展の意義や魅力を探りたいと思った。

研究の結果、絵本原画展は絵画と同じように鑑賞を楽しむだけに止まらず、様々な広がりを見せてくれた。それは展示内容以外にも、関連事業、館の雰囲気などが大きく関わっていることがわかった。絵本原画展にはそれぞれテーマが決まっているため、展覧会によって色々な違う楽しみがあり、直接人生に影響を与えるものもあった。

それらの事から絵本原画展には、子どもや若い女性だけではなく、幅広い年齢層で、様々な職業の人が見に来ていた。それは、美術館に来るきっかけとなり、美術館をより身近に感じてもらえる事となった。

これからも絵本の展覧会は盛り上がりを見せる事となり、さらなる発展を期待するばかりである。

(指導担当・石飛)